

言語の諸問題 Вопросы языкознания 2009 (3)

研究史より

G. A. クリモフの言語観

B. M. アルパートフ

ゲオルギイ・アンドレエヴィチ・クリモフ (1928-1997) はわが国の言語学史上特別の位置をしめている。彼は個別言語—コーカサス諸語、とりわけカルトヴェリ語の専門家であるとともに言語理論家でもあり、その理論的興味の範囲も比較言語学から音韻論および類型学と極めて広い。コーカサス語学者として認められ、学派を形成し、言語理論家として常に独自の道をあゆみ、ソビエトの、のちにロシアの学術研究において独自の位置を占めてきた。本稿では主に彼の理論言語学への寄与とその理論的諸概念の特徴を扱う。

G. A. クリモフの生涯は表向きさしたる事件に富んでいたとはいえない。レニングラードで生まれ、そこで幼年期と青年期を送り、学校時代に (九百日の) 封鎖を体験することになった。彼は 1946 年にレニングラード大学東洋学部コーカサス研究部門に入学し、その後、コーカサス学専攻が文学部に移るとそちらに移籍して、1952 年に卒業した。卒業後、クリモフ氏はモスクワに移って、ソビエト科学アカデミー言語学研究所の大学院に進み、やがてそこから二年間の予定でより高度な研究をすすめるためにトビリシのグルジア科学アカデミー言語学研究所に派遣された。1954 年末にモスクワの言語研究所に戻り、死ぬまでそこで働き、1975 年からコーカサス諸語セクションの主任、その後、学科主任となった。G. A. クリモフは 1955 年に修士論文の、1965 年には博士論文の公開審査に合格し、1988 年に教授資格を得ている。彼は研究所で働きながら、(その一方で) 多年にわたって『言語学の諸問題』誌の編集局長をつとめた。

候補論文である「カルトヴェリ諸語における複合的修飾語の統辞論的諸問題の原理」¹をはじめとして、クリモフ氏はコーカサス諸語の研究にもっとも多く従事してきた。大きな著作だけでも [クリモフ 1960; 1962; 1964; 1965; 1982; 1986; 1994; クリモフ、アレクセーエフ 1980] などがあり、これらの研究について専門的立場から評価することは本稿の課題を越えるが、その特徴を二つ指摘しておきたい。第一に、G. A. クリモフが

¹ Основные синтаксические вопросы атрибутивного комплекса в картвельских языках. Автореф. дис. канд. филол. наук. Тбилиси 1955.

もっとも大きな力をそそいだのはカルトヴェリ諸語であって、アブハズ・アディゲ諸語に関してはさほどでなく、ナフ・ダゲスタン諸語はもっとも少なかったこと、第二に、私たちにとって特に言っておきたい重要な点は、コーカサス学について彼が発表した数多くの論文には純粹に記述的なものや、一言語の枠内に限定されたものが殆どないことである。主たる研究テーマは、三つの言語群（これらのグループが同族関係にあるという仮説を G. A. クリモフは否定している）に属する諸言語の史的比較言語学的研究と類型学的研究である（このばあい個々のグループの枠にとらわれず、あらゆるコーカサス諸語を積極的に比べている）。彼はまたコーカサス諸語相互間と、印欧語も含めたほかの言語との言語接触や地域言語学の問題にもたずさわってきた。

この点にこの研究者の学問的アプローチの独自性があらわれている。史的比較言語学的方法を扱った本で G. A. クリモフは、大半の比較言語学者はそうした方法論を考慮しない実地論者であり、ましてや類型学や構造主義の方法論の心得もなく、それがどう利用できるか考えてみようとしないと書いている [クリモフ 1971: 3-4]。別の本ではコーカサス学者に特有の一般言語学的知識の貧弱さについても批判している [クリモフ 1986: 19-21]。彼自身は研究活動の全期間を通じて比較言語学のみならずさまざまな個別の言語研究にみられる経験主義や基本的知識の欠如と格闘してきた。

G. A. クリモフが言語学者としての自己形成をおこなったのはソビエト言語研究の変革期であった。レニングラード大学に入学したとき、公式学説として（やはりコーカサス学者であった）故 N. Ja. マールの「新理論」が支配し、ソビエトの言語研究において I. I. メシチャニーノフが（とりわけレニングラードでは強い）指導的地位を占めていた時代であった。その後、I. V. スターリンが言語学関係の著作でマールもメシチャニーノフも批判して、別のコーカサス学者である A. S. チコバヴァがソビエト言語学の第一人者一人となったが、まさにこのチコバヴァのもとでトビリシのクリモフ氏は研鑽をつんでいたのである。

A. S. チコバヴァとその他の言語学者は 1950 年代前半に革命前の伝統を復活させ、マール主義の時代に多くの点で忘れられていた比較言語学が再びかつてのように主要な研究領域となった。しかし 50 年代半ばになると、かつて「衰退と退廃」とみなされていた同時代西欧の研究理念（原理）がソビエトに浸透しはじめた。すでに公式的な政策と関係なくソビエト言語学の優先的地位と方向性がふたたび変わり始めていたのである。

かけ出しの研究者ですらこうした過程からとり残されることはできなかった。クリモフは A. S. チコバヴァが提唱したイベリア・コーカサス諸語が一つの語族を形成すると

いう一般理論も、また彼の多くの個々のアイデアも採用しなかった。チコバヴァの研究方法を G. A. クリモフはいつも単純化されたものとして評価していた。たとえば [クリモフ 1990: 51-52] 参照。また革命前のロシアの言語研究へのさしたる関心も彼にはみられない。しかしながらその活動期間を通じて（とくに 60 年代半ばからは目立って）クリモフ氏はどうやら、I. I. メシチャニーノフとある程度まで N. Ja. マールの理論、及び記述主義とその他の西欧の構造主義学派の概念という、両立できないものを両立させようとしていたかにみえる。

こうしたすべての学派や潮流に対する G. A. クリモフの見解は、彼の研究業績のなかで際立った位置を占めている、研究史を扱った著作で披露されている。N. Ja. マール、I. I. メシチャニーノフとその学派について彼は、のちに述べる著作 [クリモフ 1973: 1977]、特に 20 年代—40 年代のソビエトの言語研究の歴史を扱った著作 [クリモフ 1981] で書いている。

1950 年以降にはもう「新理論」を全体として継承しようとするものは誰もいなくなった。G. A. クリモフのばあいも N. Ja. マールの四元素のような空想論のいかなる影響もみられず、またマールが廃棄しようとした史的比較言語学の原理を否定したことは一度もなく、マール理論に辛辣な評価を下している。たとえば [クリモフ 1986: 19] 参照。しかし G. A. クリモフはこのアカデミー会員の著作に含まれている肯定的側面についても一度ならず指摘しており、科学的伝統とまだ完全には断絶していなかった初期のマールの仕事から多くのものをとり入れている。特に彼はマールが行った原カルトヴェリ諸語の再構には基本的に賛成であった [クリモフ 1971: 25]。彼はまた、たとえば行為動詞と状態動詞という動詞分類が最古のグルジア語にあったという仮説を提唱したマールの卓越した直感にも注目していた [クリモフ 1980: 123-124]。

とはいえ G. A. クリモフによれば、後期のマールも言語研究、とりわけ類型学の発展に寄与しており、まさに類型学という用語そのものを創始したのもマールであったという [クリモフ 1981: 21]。マールは、マール主義を認めない研究者の諸原理とも「内的一体性」を保ち得るような共通の原理に基づいて 20 年代—40 年代のソビエト類型学に対して歴史主義や通時的展望、形式ではなく内容（コンテシヴ）的な類型学的関心という方向性を示したのである [前掲書: 7-8]。それぞれの類型に関する呼応の構造的特徴の総体を抽出すること [前掲書: 39] や、形態論に対する統辞論の優越性を説くマールの考えは注目に値する。

しかしこの書物で（批判がないわけではないにしても）極めて高く評価すべきものと

して主たる関心が向けられているのは、I. I. メシチャニーノフとその学派（S. D. カツネリソン、S. L. ブィホフスカヤほか）の体系である。著者の意見では、この学派は時代を先取りしていて、同時代人でこれに匹敵しうるのは E. サピアしかいないという [前掲書: 39-41]。この学派は純粋に形式的な 19 世紀の伝統的類型論の枠を越えて初めて内容的原理に基づく類型学の構築という課題を提起したという。この類型学は必然的に歴史的展望をもち、言語発生論に繋がるものでなければならなかった [前掲書: 24]。それは形式的類型学にはどんな新しいものももたらさなかったが [前掲書: 26]、西欧で支配的であった専ら形式的な類型論へのアンチテーゼを含んでいた [前掲書: 33]。

自分の書物のなかで G. A. クリモフは、I. I. メシチャニーノフや彼の弟子たちが提唱した異なった思考段階に結びついている異なった言語分類について詳細に検討している。これらの分類は、同一の著者の見解も含めて、すでに提唱されてきた主格言語と能格言語という初期の区別を例外として、絶えず変化してきた。こうした研究への著者の好意的な見方にもかかわらず、その価値は要するに、何よりもまず、これまで形態論に向けられてきた類型学的考察を統辞論に広げようとする試みや、概念範疇について O. イェスベルセンが発展させた考え方も含めて、一般的諸問題を提起した点につきる。G. A. クリモフは、そうした一般的諸問題の提起を促したのはソビエトにおける 20 年代—30 年代の研究状況と社会的状況であったと正しく指摘している [前掲書: 7-8]。さらにまた類型学的研究も含めて当時あまり研究が進んでいなかった諸言語、とりわけコーカサス諸語や古アジア諸語といった言語資料の積極的活用についても指摘されているが [前掲書: 8]、その成果についての G. A. クリモフの評価はかなり批判的である。

G. A. クリモフがあげている（多くの点で N. Ja. マールから受け継がれた）I. I. メシチャニーノフ学派の欠陥は、あたかも類型の概念を語族の概念に代替できるかのような（部分的には 40 年代までに克服された）幻想 [前掲書: 21-23]、自己の考えをもっとも明確な体系性をもった音韻論のレベルまで拡張されなかったこと [前掲書: 26]、当時厳格な方法論がなかったために語彙の意味論的発達を解明しようとしてうまくいかなかったこと [前掲書: 28] である。実をいえば I. I. メシチャニーノフ学派自身の観点からして最も重要なことも不首尾に終わっていた。すなわち、これらの言語学者たちが思惟を研究する際に依拠すべきものを持たなかったために、得られた類型を明確な形で思惟の類型と関連づけることができなかったというのである [前掲書: 76-77]。G. A. クリモフはまた、彼らの段階というものの理解が（19 世紀の類型論者同様に）あまりにも単純なものだったことも指摘している [前掲書: 82-84]。この本では、こうした硬直性が次第に拒

否されることによって 40 年代におけるこの一派の危機がもたらされたこと、事実によって確証できない「言語発生論的過程の一様性」といった雄大な考えが、それに代わるものがないまま消えていき、I. I. メシチャニーノフでさえ 40 年代の労作において歴史的アプローチから共時的研究へ、さまざまな言語類型の全体的特徴を追及することから、事実上さまざまな言語の共通性と差異の確認へと移っていったことが示されている [前掲書: 98 - 99]。

G. A. クリモフが、類型研究の研究史を扱いながらこの学派を無視した（恐らくこれは内容の問題でなくてロシア語で書かれた論文はすべて無視するという習慣によるものであろうが）[前掲書: 3] アメリカの諸論文を批判していることには賛成である。多くの点で当時の「ソビエト言語学の相貌」を決定した [クリモフ 1981: 3] こうした研究を言語学史から削除することなど無論できないはずであり、「新理論」とは違い、そこには合理的な核心が存在していた。しかし G. A. クリモフ自身が結論として認めているのは、彼らの活動の成果はわずかであり、なによりもまず能格構造の研究分野にしか残っていないということである [前掲書: 108]。しかし彼の学生時代から知っていたこの学派は、クリモフ氏その人に対しても大きな影響を与えたのであり、この点について少し述べてみたい。

1950 年代末にソビエト言語学のもっとも焦眉の課題となったのは西欧の言語研究の理論と方法の修得である。当時たとえば『言語の諸問題』にはこうした理論と方法についてのある種の手ほどきを行う「Q&A」、一種の言語学的文盲撲滅のセクションが設けられ、クリモフもそこで言語年代論の方法について解説している [クリモフ 1959]。その後、西欧言語学の主な潮流を分析する共同研究の必要性が生じて、ある本 [クリモフ: 1964] でクリモフと N. Ju. アルチューノヴァ、および E. C. クブリャコヴァがアメリカ記述言語学を扱った章を共同執筆しているが（序章と「音韻論」の章も彼と E. C. クブリャコヴァの共同執筆）、これほど詳細で客観的な記述言語学の解説は現在でもわが国にはみられない。記述言語学で用いられる基本的手続きが詳細に検討され、当時のアメリカ言語学の主要潮流が対比され、「神の真理の言語学」論者と「まやかしの言語学」論者との議論といった理論的論争についても解説されている。

この章の執筆者たちは、記述言語学の命題をそのまま受け入れることも、また当時ソビエトでしばしばみられたように、この学派の考えを「観念論的」として退けることもしていない。アメリカ言語学は、解決には至らずとも言語認識論や言語モデル、言語研究の形式化といった問題についての提起では著しく進んでおり、音韻や形態の共時的研

究の方法論が大きな成果を上げたことが指摘されている【アルチューノヴァ、クリモフ、クブリャコヴァ 1964: 210】。それと同時に記述言語学の欠点として意味の弁別基準をもたないために音韻分析があまりにも抽象的であり、分布 *distribution* という基準が過大評価され、「環境 *environment*」の概念が曖昧で、その一方で言語の普遍的単位としての語が軽視されたと言われ【前掲書: 198, 206, 207-208, 219 etc.】、アメリカ構造主義の問題提起の限界、なかでも特に言語の社会的機能の問題の軽視が指摘されている【前掲書: 210】。1964年にはこの問題はもういくら時代遅れになっていた。というのはちょうどその頃アメリカで社会言語学への関心が芽生えたからで、しかし40年代—50年代の大半の記述言語学者は原則としてそのような問題はまったく取り上げようとしなかったのである。

もっと重要なことは、アメリカではこの本が出版されるまでに記述言語学がすでに生成文法に席を譲っていたことである。クリモフとその共著者たちの評価はどっちつかずであった。記述言語学の支配的時期を1933—1957年とし【アルチューノヴァ、クリモフ、クブリャコヴァ 1964: 178】、つまり記述言語学の支配的時期はN. チョムスキーが初めて考えを公表すると同時に終わったとするアメリカの一般的な時代区分に依拠する一方で、チョムスキーの目的は本質的に記述的なものとは異なっていたが、その目的が形式的記述の枠内に留まっている以上、生成文法も同じ記述言語学全体の発展の新局面にすぎないと規定するのである【前掲: 178】。こういう両義的な評価はあれこれの傾向について評価がまだ定まらない過渡期に特有のものといえよう。

しかし生成文法の考え方はクリモフ氏の研究活動には影響を与えなかった。彼は、チョムスキーの考えは個々の研究目的には役立ち、彼自身も分類学的な *taxonomic* 手法を好んで使ったと述べている【クリモフ 1967: 10】。記述言語学の影響とそれに対する反発は初期の理論的著作にもみとめられる【クリモフ 1967】。おおむね当時のさまざまな考えの分析に割かれたこの本ではわが国やアメリカ、ヨーロッパ言語学における音素と形態素に関する様々な研究が比較対照され、音素について（G. A. クリモフによれば歴史的意味しかない）心理的研究、生理的、相対的物理的研究（N. トルベツコイほか）がとり上げられている。（音素と形態素は互いに独立のものとされてきた伝統に反して）そうした研究と形態素に対する様々なアプローチが比較対照され、著者は趙元任（ユアン・レン・チャオ）とC. I. ベルンシュタインの考えに依拠して、目的に応じて有効な異なった形態、音韻モデルがあり得て当然だという結論に達し、さまざまな概念の長所と短所を指摘している【前掲書: 83, 87, 108-110】。

ここでは G. A. クリモフ自身の観点の輪郭が示されているに過ぎない。彼は言語の主要単位は音素でも形態素でもなく語であるから、形態的分析も音韻的分析も語と語の同一性から出発すべきだと考えていた [前掲書: 76]。こういった研究方法は、形態論については一度ならず主張されてきたが、音韻論については当然のことではなかった。しかしその方法が音韻論の分野でどんな働きをするかについての詳細な説明はこの本にはみられない。語を媒介にした音素の定義はわが国の言語学では進まず、G. A. クリモフ自身もその後「比較の理論と類型学」に力を集中して、「古典的」構造主義の諸問題から離れてしまった。しかし、(N. D. アルチューノヴァと共著で) ソビエト構造言語学分野の研究を紹介する際、E. D. ポリヴァーノフ、N. F. ヤーコヴレフ、A. I. スミルニツキイやモスクワの音韻論者、もっと早い時期の他の研究者の仕事について、50—60 年代のソビエト構造言語学研究の連続性が正しく指摘されていることは言うておかねばならない [アルチューノヴァ、クリモフ 1968]。

G. A. クリモフは多年にわたってコーカサス諸語の三つの言語群に関する歴史的比較研究の諸問題に携わり、比較言語学のもつ根本的矛盾につきあたった。研究の方法論は高度に発達していても、理論的仕上げはあまり進んでいなかったのである。彼はこの点についてコーカサス諸語の数多くの研究や個別の研究発表で書いている。小冊子 [クリモフ 1971] および彼の最後の理論的著作 [クリモフ 1990] 参照。

クリモフ氏は「語の親近性に関わるさまざまな諸事実の研究分野で比較言語学者が達成した経験的成功とその方法論の理論的装備の仕上げのあいだにある溝」を指摘している [前掲書: 153]、さらにまた [前掲書: 4]。比較言語学の理論的諸問題の検討は、N. トルベツコイがそうであったように、この学問分野をその根底から見直す可能性があった。系統樹という概念は現実を単純化しすぎているから言語学者は「系統樹」の幻想から解放されねばならないと G. A. クリモフは考えたが [前掲書 154]、全体としてさほど極端に走らず、その基本的仮定は認めた。しかし彼は、英語はゲルマン語でもありロマンス語でもあると考えることができるという V. ピザーニの考えを拒み、「言語混合」という考えにも賛成できなかった [前掲書: 8]。彼の考えでは、たとえ祖語の再構によって知られる部分が「氷山の一角」にすぎないとしても [クリモフ 1971: 38]、祖語の概念を拒否して祖語があること以外、祖語については何も知ることにはできないとする不可知論に陥ってはならないと言いつつ [クリモフ 1990: 41]、同時に再構の可能性についての問題がまだ解決されていないということも認めていた [前掲書: 4]。

しかし比較言語学者の伝統的方法を、共時的分析という構造主義的方法、さらにまた

類型学的方法を（比較言語学の方法と混同することなく）駆使する通時的分析によって補完することを彼は提案している。たとえば、規則的対応ではなく（規則性は大量の借用によっても現われ得る）、言語間の体系的対応をとり上げ、その場合、体系的対応を確定するのは共時的手法であって、歴史的解釈はその結果に対してあとから与えられるものだというのである【クリモフ 1971: 20; 1990: 16】。しかし得られた結果は類型学的に検証されなければならない。たとえば体系的対応だけに立脚すれば、祖語には不自然なくらい膨大な数の音素あることになる【クリモフ 1990:99】。とはいえむろん原理的に異なった比較言語学と類型学のアプローチとを混同してはならない。比較言語学者にとって類型学が重要な役割を果たすのはそのプロセスの最初と最後であって、まず類型学はある言語がどれかの語族に属するという仮説を立てるのを助け（このことはすでに1920年に E. D. ポリヴァーノフが書いている）、得られた結果が最後に類型学によって検証されるのである【前掲書: 8-9】。

G. A. クリモフは 20 世紀に考案された比較言語学の研究方法の拡張と補強にとりこんだ。内的再構と確立論の方法である。言語年代論についての彼の見解はいっそう入り組んでいる。原則として否認はしないが、言語年代論を言語的親近性の程度を確定する主要方法とは考えず、補助的な研究方法だと考えるのである【クリモフ 1971:15-16; 1990: 22-24】。彼の考えでは、言語年代論が役に立つのは相対年代の決定であって、絶対年代ではないという【クリモフ 1971:74; 1990: 119- 121】。

おおむね G. A. クリモフのアプローチは穏健であり、A. シュライヒャーや A. S. チュコバヴァの素朴な現実主義や初期メイエの不可知論もそうだったような、極端論に走ることはなかった【クリモフ 1990: 51-52】。（それにも拘わらず、メイエが彼にあたえた影響はもっとも著しい）。彼は、適用範囲は狭くても厳密に証明された結論を（コーカサス語学者として絶えずぶつからねばならなかったような）、規模は大きくても方法論的に問題のある立論よりも、無条件によしとしていたのである。比較言語学では起源的關係と接触による関係を見分ける方法が確立されていなかったので、言語間の関係が遠くなればなるほどその二つを見分けることは難しくなると彼は述べている【クリモフ 1971: 30】。それゆえ彼は遠い類縁関係を立てようとするいかなる試みにも疑いをもって接し、「不毛な」イベリア・コーカサス、アルタイ、ノストラ諸語といった仮説を同類のものと考えた。彼は、厳しさの程度は違うものの一再ならずそのような仮説は容認できないと書いている【クリモフ 1971: 31; 1986: 14; 1990: 3】。彼はまたアブハズ・アディゲ、ナフ・ダゲスタン諸語の類縁性を主張する「資質の劣る比較言語学者」N. トルベツコ

イの考えも認めなかった。とりわけ厳しい評価を与えたのは S. A. スタロスチンの遠い類縁性に関する考察で、彼はそれを「ディレッタントの典型」と呼んだ [前掲書 129-130]。このような観点は、我が国で確立していた、ノストラ理論を「わが国言語学の特徴」とみる見解と異なっていたために、とりわけ 1990 年代には彼を研究者として孤立させることになった。

比較の理論と並行して G. A. クリモフは言語類型学の理論的諸問題にもとりくみ、この方面で公刊された少なくない著作のなかでも特に際立ったものとして、三つの単著 [クリモフ 1973; 1977; 1983] と一つの論文 [クリモフ 1975] がある。コーカサス研究の枠を超えた彼のしごとそのなかでもこれらの反響はきわめて大きく、外国ではこれだけが評判になっている。

この分野で彼は I. I. メシチャニーノフの学派の研究を引き継ぎ、前にも述べたように当時はその研究史も研究していて、そこからいくつかの基本的原理をとり出した。類型学的研究は、形式的な研究でなく内容的な（コンテンシヴ）研究であらねばならず、個別の言語事象に限定せず、体系を全体として対照すべきであり、統辞的現象の研究が形態的現象の研究に優先されるといったものがそれである。それと同時にこの学派の具体的な理論体系の大半を退け、原始的思惟の言語類型への反映とか、類型学的体系と言語起源論とのつながりといった、明らかにあまりにも証明不可能な仮説を拒否した。

この学派の研究でもっとも将来性が期待できると G. A. クリモフが認めたのは、主格構造と能格構造との比較研究である（といっても、ずっと前に H. シュハルトや A. デイルらが研究を始めていたのだが）。この問題については特に一冊の書物があてられている [クリモフ 1973]。

能格類型は言語類型の一つであるが、類型というのは具体的諸言語の特徴ではなく、異なったかたちでさまざまな言語において実現されるところの抽象的な基準であると考えられる（混合類型はあり得ないが、具体的諸言語では絶えず類型の混合が起こっている） [クリモフ 1975: 21-22]。ここでクリモフは V. スカリチカと B. A. ウスペンスキイの考えを発展させた。類型は形式的であり得るが（たとえば膠着ないし孤立語）、より大きな説明可能性をもつのは、内容的諸原理に基づいて区別される類型である [前掲書 23-24]。

G. A. クリモフによれば能格性という概念は、形態ではなく、深層の内容に属している。能格的現象は、おそらく音韻を除いて言語の体系の全てのレベルで現われるとしても、まず第一に、統辞的、語彙的なものである [クリモフ 1973: 3-4, 5, 59 ほか]。音韻

論のレベルを軽視したとあって I. I. メシチャニーノフの学派を批判しながら類型学分野のどの著作でも彼は自分の考えを音韻のヴェルにまで広げることではできなかった。言語類型はそれぞれ主格言語と同じくその決定因子をもつはずである。能格類型の決定因子は、主格類型と同じ主体・客体の関係である [前掲書: 141]。しかしより晩年に近い労作で G. A. クリモフが A. E. キブリクの用語をもちいて能格類型の決定因子と呼んでいるのは、主体・客体関係に似てはいるが同じではない行為主・事実主 (agentive / factitive) という原理の対立である [クリモフ 1977: 166]。そうはいっても能格類型と主格類型が同じだということにはならない。二つのタイプの違いをずっと以前から知られていた格体系の違いにつきると考えることはできないのであり、語尾変化を失った言語も能格言語になり得る。能格構文には動詞文も名詞文あり、その構文の一般化の程度にしたがって能格言語は、名詞型にも、動詞型にも、混合型にもなる [クリモフ 1973: 42-44]。統辞論的な能格 (活格) 言語の特徴は文の名詞成分の全てに対する述語の支配性 (優勢) であり [前掲書: 46]、能格言語には能動・受動という態の対立が存在せず [前掲書: 104]、語彙面ではこれらの言語には他動詞類と自動詞類の区別があり、その対立は主格言語よりもはっきりしている [前掲書 60]。能格言語の随伴事象、即ち全てではないが、多くの能格言語に固有の特徴も明らかになっている。「主語—補語—述語」という語順、格の中に能格があつて属格と与格がないこと、名詞に分類があることなどである [前掲書 86, 93-95, 111, 124]。

またこの本では能格類型は共時的に考察されるにとどまらず、通時的にも扱われている。主体・客体関係の形成に基づく能格構造の発生、その関係の発達とともに、動詞型が混合型に変わり、さらに名詞型に変わるという過程 [クリモフ 1973: 108 etc.]、主格言語への移行などが考察されている。G. A. クリモフによれば、主格言語から能格言語への移行は現実にはありえず、個々の特徴として現われるにすぎないが [前掲書: 212]、その逆は広く認められているという。

研究者が能格性の研究領域でソビエトやその他の国でつくられた伝統を抛り所にできたのに対して、もう一つの類型—活格類型—が言語に関わる学で市民権を得られたのは何よりも先ずクリモフ氏のおかげである。活格類型の概念は様々な著作で簡略に述べられているが [クリモフ 1973: 213-226; 1975]、特にそれだけを扱った書物もある [クリモフ 1977]。

活格構造の基本的特徴は能格構造よりもはるかに明瞭な形で定式化できたが、抛り所とする事実資料ははるかに少なかった。世界の能格言語が主格言語よりほんの少しだけ

少なく [クリモフ 1973: 256]、またその多くがかなり手際よく記述されている（幾つかはクリモフ氏がコーカサスで調べたもの）のに対して、G. A. クリモフ自身が無条件に活格言語としてみとめているのは、北アメリカの幾つかの言語にすぎない [前掲書: 5]。それ以外の言語には活格言語の残滓が残っているだけで、インディアン諸語は文法の記述でしか研究できないのに、その記述は恐らく部分的には不適切で、理論的命題を事実によって確証するという課題は容易ではない。

G. A. クリモフによれば、活格類型の基本的特徴は能格類型や主格類型とは異なって、主体・客体関係ではなく、文の活性と不活性という項の対立を伝えることにある [クリモフ 1977: 3]。統辞論的な基本的特徴はそれぞれ活性と不活性という意味的な決定因子から導かれる [前掲書: 55]。初期の段階では二つの原理はそれぞれ有生および無生の原理として形づくられる [前掲: 67]。能格性の場合に見られるように、構造の変化は何よりもまず語彙にあらわれ、その後シンタックスに、最後にもっとも保守的な形態論へと移ってゆく [前掲書: 69, 80-81]。能格構造と違って活格構造は動詞にあらわれ、活格動詞型と活格混合型の言語があるが、名詞型は記録されていない [前掲書: 61]。活格言語では二つの動詞系列がなんらかのかたちで対立していて、その対立は有生・無生の対立から行為動詞と状態動詞の対立をへて、他動詞・自動詞の対立へと進むが、そのばあい（保守的な一訳者）形態論は言うまでもないことだが、いつも意味のほうが生格シンタックスより早く変化する [前掲書: 172-176, 188]。主格言語と能格言語には情緒構文のように活格性の残滓が残っていることがある [前掲書: 63-64]。

この書物で示されたさまざまなレベルにおける活格言語の本質的特徴は、この類型の普遍的事象であることも随伴事象であることもある。その多くはつい最近まで（ときには今でも）全ての言語に必然的なものと考えられてきたことと矛盾するが、実際には主格言語と能格言語の、あるいは主格言語だけの（あるいはヨーロッパの主格言語という狭いクラスの）類型学的特徴である。それは独立した品詞としての形容詞の欠如（これに対応する意味は状態動詞によって表される）、連辞と不定詞の欠如、体の存在と動詞時制の範疇の欠如、数の範疇の未発達、動詞に救心相と遠心相がある場合の抱合 incorporation の頻繁な発達などである） [クリモフ 1977: 82, 102-105, 116, 125-128, 140, 144, 156]。

さらにまた活格構造の起源と発達の問題が考察されている。それは G. A. クリモフの全著作において歴史的に主格言語と能格言語に先行する構造として解釈されている。ただその考え方はいくらか変化がみられる。1973 年の書物では、活格構造から主格構造

に直接発達するばあいも認められたが、活格構造から能格構造、能格構造から主格構造への発達が一般的原則とする考えが堅持されていた〔クリモフ 1973: 253〕。しかし 1977 年の書物では活格構造から主格構造へも能格構造へも（その後の主格構造への移行の可能性も含めて）等しく変化する可能性があるということから論をすすめている〔クリモフ 1977: 172 etc.〕。個々の現象に対する評価も変わった。最初 G. A. クリモフはグルジア語の能格的特徴についての伝統的な考えを受け入れていたが、その後、カルトヴェリ諸語には他のコーカサス諸語と違って能格構造はなく、能格構造が存在したこともなくて、活格構造の残滓を能格性で見誤ったのだという結論に到達している。格形の意味的インヴァリアント発見の可能性についてクリモフが当初の懐疑的な立場を拒否したことも注目すべきである。ずっと後の労作で彼は能格の一般的意義を行為の動因としたのである〔クリモフ、アレクセーエフ 1980: 37-38〕。

G. A. クリモフは活格構造を最古のものとは認めていなくて、それに先だつたとえはバントゥーその他の言語にみられるような、いわゆる多分類構造があつて、多分類構造から活格構造への発達は、より細かい分類からより抽象的な有生・無生という抽象的区別へ、さらに抽象的な活性・不活性という区分へとすすんだと述べている〔クリモフ 1977: 264-303〕。彼は多分類構造については詳細な検討を加えず、語構成と形態の区別がないこと、格の範疇の欠如など、別の類型に似たものがない幾つの特徴を指摘するに止めている〔前掲書 131, 192, 292〕。一度ならず彼はもっと初期の、そして中立的と呼ばれる、たぶん原初の構造を提示しているが〔クリモフ 1975: 26; 1977: 292〕、それについては殆ど語っていない。クリモフ自身も認めているもう一つの理論的に未完成な点は〔クリモフ 1977: 162〕、主格構造の体系的特徴付けがないことであつた。この構造は他の構造よりはるかに多く研究されているように思われていたのだが、その体系としての特徴は世界の言語に共通の特徴だと長いあいだ考えられてきたのである（これは一般言語学と類型学の初期の発達段階では避けられないことであつた）。G. A. クリモフの体系の長所は、このような同一視を断固として拒否することにあるが、特に能格言語と同じか殆ど同じ体系的特徴が主格言語にあるのなら、一体なにが主格言語を特徴づけているのかを明らかにする時間がなかったか、できなかったのである。

G. A. クリモフは、類型学は通時の助けがなければ不完全だと考えていた。この点で彼の立場はあいまいである。彼は 19 世紀の類型論者や、言語と思维の発達段階という証明不能な仮説を提唱した N. Ja. マールの追隨者たちの失敗を考慮して、こういう単純化された立論を警戒していた。たとえば〔クリモフ 1973: 211〕参照。しかし歴史的

発達と一定の関連をもつ五つの言語類型という彼の考えには段階論的傾向が著しい。一度ならず彼は、たとえば「活性と不活性とを対立させる意味論的な特徴そのものが、主体と客体という対立への大まかな接近を意味している」[クリモフ 1977: 166] という考えを述べている。同じようにして多分類構造と活格構造との関係も活格言語の使用者の抽象的思考の発達に結びつけて論じられている [前掲書 267]。すなわちある類型から別の類型への移行は、未発達な思考から発達した思考への移行だということである。全体として G. A. クリモフは能格言語と主格言語の相互関係については（とりわけ後期の著作では）慎重であるが、1977 年の本には「後者（主体・客体原理）への接近が能格構造の意味論的な決定因子である」[前掲書: 166] と書いている。すなわち能格言語も思考においては主格言語に比べて低い発達段階にあるというのである。これこそまさに段階理論ではないか！

比較言語学の分野ではあまりにも広範すぎる理論体系になることを恐れて極めて慎重な G. A. クリモフも、逆に類型学の分野ではそうした極めて重大な理論に傾く傾向があった。この研究者が復活させた段階の概念（理論）は、厳密化されているとはいえ、あまりにも多くの事実を一般的図式にはめこんだために、論破はできないにしても、証明されないままである。数多くの言語の特徴を分析することが不可欠であろう。

本稿の筆者がたずさわった二つの言語、アイヌ語と日本語について簡単に述べておきたい。他動詞と自動詞、受動態があって典型的な主格言語的格形式をもっている日本語を主格言語と考えることに疑問をもつものはだれもいなかった。その一方で文の名詞成分に対する述語の支配性（優勢）という点で日本語は G. A. クリモフが能格および活格構造の特徴と規定しているものに一致している。日本語学では西欧語学よりも容易に述語が文の頂点であると認められてきたのは理由のないことではなかった。我々が見慣れてきたヨーロッパの主格言語でそれを妨げたのは、G. A. クリモフが、普遍的とはいわないまでも主格構造の随伴事象と考えたらしい、述語と主語の一致である。日本語の語順も「能格・活格」的である。

アイヌ語はクリモフ氏が提示した活格言語のほぼ全ての特徴をもっているが（[アルパートフ 1983] 参照）、主要な特徴だけを欠いている。アイヌ語の動詞は他動詞と自動詞に分かれ、人称語尾も他動詞と自動詞で異なっているので、この分化は主格言語や能格言語より厳格でさえあるといえる。それゆえ G. A. クリモフは、私たちがこの言語の特徴について話しあったとき、これを主格言語に含めたのである。しかしアイヌ語と北米の活格諸言語にみられる類型的類似はどう説明すればよかろう？

とはいえ G. A. クリモフが調べていない言語に兼ね備わった特徴が、異なった地域の諸言語では偶然とはいえ関係をもつものとして提示されているという事実がすでに、彼の考えの重要性を物語っている。活格構造という概念は、それに対してどんな立場をとるにせよ、言語類型学のものであり、この分野の研究は将来的展望をもっている。能格性の研究においてもこの研究者の寄与には疑う余地がない。類型学の基本的理念は国外でも G. A. クリモフによって発表されており [Klimov: 1974; 1977; 1979; 1983; 1984; 1985]、1999 年には日本語の翻訳書も出版されている [クリモフ 1977]。

最後に、もうひとつの G. A. クリモフの論文 [クリモフ 1980] について述べておきたい。そこでは起源的、類型学的、地域的という三つの可能な言語の分類法が比較対照され、彼は三つのすべてに携わってきた。補完的關係にある三つのアプローチに共通するのは、いつも多数の言語の類似性についてそれぞれの視点で解釈することが課題とされ、その背後には社会的類似性について三通りの解釈を可能にする共通の大きな可能性が控えているという点である [クリモフ 前掲書: 7]。もう一つの共通点はどの分類もある点では構造的で共時的基盤に依拠しながら、通時的基盤とも結びついていることである [前掲書: 10]。しかし起源的分類は拡散に際して保たれる構造的諸要素を析出し、地域的分類は集約の際に獲得される諸要素を析出するが、類型学的分類はいずれのプロセスとも無関係である [前掲書: 10]。クリモフのこの論文は彼を導いた学問的関心を示しており、彼が興味をもったのは何よりもまずあらゆる局面における言語の類似と相違の問題であった。

しかしながら G. A. クリモフの研究活動の評価は、三十年以上にわたる『言語学の諸問題』誌における言語学への奉仕について語らなければ、完全とはいえまい。歴史的時代、学問的優位や流行、雑誌の編集主幹は変わったが、クリモフ氏は、この国の指導的言語学誌が研究状況を反映し、指導的研究者たちをそこに結集させるために全力を尽くした。この点で我々も彼に感謝せねばならない。

(木下晴世 訳)